
“一時”停止

豊富銭平

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

“一時”停止

【コード】

N4929N

【作者名】

豊富銭平

【あらすじ】

もっとこの時間が続けば……、と考えた男の悲しい結末。

(前書き)

勢いだけで書きました……すみません；

年をとる毎に、歳月が早く過ぎ去っていくように感じられるというのはよく聞くが、その男の場合はまったくの逆だった。

まだ大学生。就職のことも曖昧にしか考えていないぐらいの、気ままな生活。

残酷なことに、彼は自分が平凡すぎるほど平凡であるということに嫌というほど理解していた。

「おれはきつと、これからもつまらない人生を送っていくのだから……」

寝る前の鬱な時間、こう呟くことが癖になってきていた。

なにかしなければ……、でも何をすれば？ 日々そんなアイデンティティに悩まされ、若気の至りか、本気で超能力を身につけられないかと考えたりもした。しかし、すべては無意味なのだ。彼自信が行動を起こさない限り……。

しかし、そんな彼にも転機が訪れた。

恋をしたのだ。

いわゆる一目惚れというやつで、自分でもおどろくほど積極的に話しかけたりもした。相手もまんざらでもない様子で、話は弾む。

とりたてて美人でもない。育ちのよさを感じさせる気品も、お世辞にもあるとはいえない。

ただ、波長が合ったとでもいうべきなのだろうか。二人は講義と寝る時間以外は、すべてメールのやり取りに没頭した。

しかし、交際にまで発展したわけではない。

男には度胸が足りなかった。

もっと確実な信頼関係を築き上げ、絶対に断られないところで気持ちを告げるつもりでいた。

ところが、相手の女はというと、彼にじれったさを覚えていた。

友人からは「付き合ってるんでしょ？」としつこく聞かれるが、彼

女には答えようがないのだ。あまりに微妙な関係。かといって、考えが古いのか、女から告白というのも躊躇われる。

策を講じた結果、女は男を急かせるようなメールを送ることにした。

「A君つてももしろい人だね」

これを受信した男は、慌てふためいた。しかし、女の策略どおりとはいかない。

いままで彼女がいたことのない男は、この女に執着していたといつてもいいだろう。絶対にこのひととなら付き合える。それが最近の生きがいにもなっていた。彼女とのメールのやり取りがあつたからこそ、つまらない授業や辛いバイトもなんとか乗り越えてこれたのだ。

もつと時間があつたら。

男はそう考えた。

さつさと告白して、自分のものにしてしまおうという考えは残念ながら浮かばなかった。ほかのやつが関与できないところで、二人だけの空間で、その状況があれば彼女との関係も親密になるはずだと。

ふつつならば、そんな妄想を抱いたところで、所詮はつまらない妄想だ、と頭を横に振るところだが、彼は違った。

本気で、時間を止める術はないかと研究を始めたのだ。

それは恐ろしいほどの執念だった。今まで以上に講義を集中して聞き、図書館に通い、インターネットで情報を集め、技術を極めた。「そんなアホみたいなのに青春の無駄遣いをするのはやめろよ。できるわけがない」

彼の友人たちは、口をそろえてこう言う。

しかし、彼は部屋に籠って研究を続けた。自分でもおかしいと思うが、一旦ハマると抜けられなくなっていたのだ。

中途半端にはしたくない。この研究も、彼女との関係も……！
そして、遂にそれは完成した。

どのような論理か、どのような経緯でできあがったのか。そんなことは本人にもわからない。正確に作動するのも、まだわからない。しかし、男はこれで完璧だという自信があった。

時間を止めて、どうやって自分と彼女だけをその対象外にするか、そんなことは後から考えればいい。

とにかく今は、本当にこの装置が作動するのか、確かめてみなければならぬ。

スイッチを入れる。

途端に 静寂。

怖いぐらいに、なんの物音もしない。

男はすぐに不安になったが、生物の動きが停止しているのを見なければ成功かどうか分からない。現に、彼は動いているのだから。時間だけ止まって、生物は動いているとなれば、大問題だ。

部屋を出ようとドアノブに手をかけた。しかし、どういうことだろう。ドアノブはビクともしない。

鍵はついていないのに、なぜ……？

何度も試してみたが、やはり駄目だった。１ミリたりとも動かないのだ。手ごたえすらない。

男は窓に駆け寄る。しかし、これも同じことだった。

「あたりまえか……」

彼はすぐに結論を導き出した。

「時間を止めているのだから、ドアも窓も動くわけがない」

そう呟くと、彼は笑いだした。乾いた笑いだ。

失敗したことを自分をばかにしているのではない。装置が完璧すぎることに誇らしかったのだ。

おれは時間を止めたんだ……！

一度、装置のスイッチを切り、改良を加えればなんとかなるだろう。彼は早速、取りかかろうとした。

が、なんとということだろう、スイッチが押せないのだ。

ドアや窓と同様、押したところで何の手ごたえもない。ただ触れ

ている、という感じしかない。

彼は愕然とした。スイッチを押さなくては、再び時間を動かすことはできない！

部屋の隅にあるテニスのラケットが目に入る。

あれで装置を壊してしまおうか、イチかバチかだ。

しかし、ラケットもその場から動かない。持ち上げることができないのだ。

ヤケクソ気味に、男は素手で装置を叩いた。しかし、それも無駄だった。叩いた手が痛くなることもない。

彼は、永遠にこの時間の中に閉じ込められたのだ。

食べるものもない。あつたとしても、それを口に入れることは不可能だろう。

そして、彼が飢えて死んだとしても、時間が動き出すということには有りえない。

このまま、永遠に、この一時ですべてが停止した。地球の自転も、太陽の活動もすべて。

神様も、このような終末は予期していなかったことだろう。

(後書き)

批評お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4929n/>

“一時”停止

2010年10月8日11時22分発行